慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	副詞「つい」についての一考察
Sub Title	
Author	村上, 絢乃(Murakami, Ayano)
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2019
Jtitle	日本語と日本語教育 No.47 (2019. 3) ,p.19- 32
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20190300-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　日本語・日本文化教育センター紀要
『日本語と日本語教育』47: 19–32（2019.3）

副詞「つい」についての一考察

村　上　絢　乃

1.　はじめに

副詞「つい」の意味は多くの辞書で下記のように記述される傾向にある。ここでは、『例解新国語辞典』の例を挙げる。

①時間や距離がいくらも離れていない
②そんな気持ちはなかったのに、思わずそうなって。

②の意味の場合、副詞「思わず」「うっかり」で言い換えられる場合がある。実際に辞書の意味記述では、この二語で言い換えられているものが多く見られた。この異同について、筆者は村上（2011）で意義素と共起表現の両方の視点から意味分析を行った。先行研究では、副詞「つい」は「無意識に」あるいは「意図しないで」行った行動について用いられる点で「思わず」「うっかり」と共通しているが、「つい」が他の二語と異なる点は「抑制力の不足、または、気の緩みによる行動」で「結果の予測」があること、また、「習慣的・本能的」行動であること等の分析結果を示している。

しかし、辞書の記述を詳しく調べると、上記①②の他に、下記のような記述も見られた。同様に『例解新国語辞典』の記述を以下に示す。

③しようと思っていたのに、なぜか、そうならなくて。

辞書の意味記述では「つい」は「思わず」「うっかり」と言い換えられることが多いのだが、③のような場合は言い換えられない。

村上（2011）では、「思わず」「うっかり」との異同を分析するため、②と③をまとめて、「意図的な行為ではない」という意味とする立場をとった。しかし、「つい」の意味を更に分析すると、②「そんな気持ちはなかったの

に」と③「しようと思っていたのに」では、話者の意識に何らかの違いがあるのではないかとも考えられる。そこで、ここでは「つい」一語を取り上げ、その意味や用法の違いについて先行研究を参考にして考えてみたい。

2. 先行研究

2-1. 浅野百合子（1980）

浅野百合子（1980）は、「つい」「思わず」「うっかり」の意義素としての共通点は「〈意志で制御できる行動〉を〈意図しないで〉行う場合に用いる点にある」と定義する。では、この三語が使い分けられるのはなぜか。それは、共通の意義特徴である〈意志で制御できる行動〉がそれぞれ違うからであると述べている。

まず、浅野は「うっかり」の〈意志で制御できる行動〉は〈注意力の不足〉が原因となる行動であり、「つい」の場合は〈抑制すべき〉行動であるとしている。

（1）ぬれた手でウッカリコンセントにさわった。
（2）あの調子で頼まれると断れなくなって、（○ツイ／×ウッカリ）承知してしまうのです。

（1）は「不注意にも」に置き換えられるが、（2）の場合「断れなくなる」のは「不注意にも」とは置き換えられない。このことから、「うっかり」は「〈注意力の不足〉が原因の場合に用いられる」と述べている

そして、次のような例を見ると、「してはならないことをしてしまった」という後悔のようなものが感じられるため、「つい」が用いられる場合の〈意図しないで〉行う行動は〈抑制すべき行動〉であるとしている。

（3）甘いものを見るとツイ手が出てしまう。

その行動をとれば結果的にこうなるというような「行動の予測」がある

ので〈制御すべき行動〉なのであり、その予測があったにも関わらずしてしまったというのが「つい」なのである。結果が予測できるにも関わらずそのような行動を取ってしまうことについて浅野は、「何らかの外的な状況に誘発された〈内的な動因が、それを抑制する力を越える〉からである」としている。(3) の例であれば、「甘いものが目の前にある」という〈刺激〉が「食べたい」という〈内的な動因〉を誘発する。この〈内的な動因〉が「健康のため（太らないため）食べてはいけない」という〈抑制力〉を上回り、その結果「食べてしまう」ということになる。

(4) 長年定期で通勤していたので、駅に入ると、ツイポケットに手をやってしまう。

また、(4) の場合、〈抑制力〉はあまり感じられないが、駅に入るという外的な状況によって誘発される「ポケットに手をやる」という習慣の持つ力、すなわち〈内的な動因〉が、「手をやる必要はない」という軽い〈抑制力〉を上回っていると説明する。

さらに、浅野は「つい」「うっかり」それぞれに見られた〈注意力〉や〈抑制力〉とは無関係で、単に〈刺激〉が原因となり、それに〈予想外〉の行動が直接結びついているというのが「思わず」であるとしている。

(5) 気の毒でツイ言いそびれてしまった。

(5) の場合、「思わず」では言い換えられない。それは、気の毒だと思えば当然「言いそびれる」という結果が〈予想〉されることであると分析する。浅野の分析を踏まえると、「行動の予測」があるので〈制御すべき行動〉であり、さらに、「気の毒だと思った」ことが〈抑制力の不足〉を生じさせたと考えることができるのではないか。

この「つい…そびれる」の表現に言及しているのは浅野だけであった。

2-2.　森田良行（1989）

森田良行（1989）は、「つい」を「ほとんど意識しない程度という状態の、自己中心的な把握である。そこから、場面や状況が違っているにもかかわらず、その違いが意識の底から消えてしまって、それがないかのように本能的、習慣的に事を行ってしまう場合にも用いられる。」と定義する。

また、森田は、下記のような例を挙げ、「つい」は習慣や習性から自然にそうなってしまい、同じ状況であれば何度も同じことを繰り返す場合に用いられるとする。

（6）今まで定期で通学していたものだから、改札口を通るとき、ついポケットに手をやってしまう

これは浅野の（4）と同様の例である。

2-3.　小矢野哲夫（1983）

小矢野哲夫（1983）は、「「つい」には述語の表す事態を好ましくないと評価する気持は含まれていない。」とする。例えば、（7）（8）のような場合、「「自戒すべき行動」とか「抑制すべき行動」とかの規定は強すぎる」というのである。

（7）頼もしくて、ついこちらの頭の働きも動員されて、（略）（幸田文『流れる』新潮文庫 p. 156）
（8）彼が朋子に風呂場で見せたことをすっかり忘れてしまったのか、それとも領収書かなにかをとり出すつもりが、つい名刺の方へ指が触れたのかもしれない。（山本道子「老人の鴨」『ベティさんの庭』新潮文庫 p. 119）

そして、森田（1989）が「本能的・習慣的にことを行ってしまう」と述べるように、小矢野は「評価的意味合いに関しては中立だと規定する方がいい」としている。

2-4.　渡辺実（1989）

渡辺実（1989）は、「つい　P だ。（P はある事態を表す）」というモデルを立て、「つい」と共起する動詞を一括する意義素性を「人間のコントロールし得る事態」と仮定する。そして、「P は実現させるべきではない（実現させない方が望ましい）事態、と位置づけられている」とする。つまり、「「コントロールして実現を避けた方がよい事態」という評価的条件を受けたものが、P の位置に立つ資格を得る」と述べる。

これらの条件により「つい」は「制禦力の弱化を招いてしまった心の緩みを表す」とする。また、P の実現は「失態として後悔されている、というほど自責的ではない」とし、「つい」は「無意志化・無責任化の副詞である」と定義している。

3.　各辞書による意味記述

国語辞典における「つい」の意味記述について、国語辞典 15 冊を対象に意味内容を検討した。その結果、「うっかり」「思わず」で言い換えられているものも多く見られ、そのうち 5 冊は「うっかり」または「思わず」との言い換えのみで意味記述が済まされていた。その他の辞書は、「（そうする気持ちがないのに／意図してではなく）してしまうさま」の意味で記述する傾向にあった。

また、『新明解国語辞典　第六版』は、次のように記述している。

> 「その場の状況に影響されて、そのつもりがなかった（普通ならやらない）ことをしてしまう様子」
> 〔強調形は「ついつい①」:「おだてられて―その気になる／忙しくて―忘れてしまった／甘い物を見ると―手が出る」〕

他の辞書の記述と同様に「意図的な行為ではない」ことを表しているが、「その場の状況に影響されて」と書き加えている点が特徴である。他にも、「しようと思っていたのに」「その場の状況に流されて」といった表現が加

えられている辞書があった。

また、『例解新国語辞典』『大辞林』『学研国語大辞典』では意味記述を三つに分けていた。『例解新国語辞典』による記述を以下に挙げる。

①時間や距離がいくらも離れていない
［用例］つい目と鼻の先。ついさっき来たばかりだ。
②そんな気持ちはなかったのに、思わずそうなって。
［用例］ついもらい泣きをしてしまった。
③しようと思っていたのに、なぜか、そうならなくて。
［用例］寄ろうと思いながら、つい行きそびれてしまった。

ここで注目したいのは、他の辞書では③の意味用法も②に含めているのに対して、この 3 冊は②と③を分けて記述している点である。②の「そんな気持ちはなかったのに、思わずそうなった」ことと、③「しようと思っていたのに、そうならなかった」ことを同じ用法と考えるか、それぞれ独立した意味用法とするか、である。つまり、②の用例「もらい泣きする」ことも③の用例「行きそびれる」ことも「思っていたことと違う結果になった」点で共通であると考えるならば、②「そんな気持ちはなかったのに、思わずそうなって」という意味記述のみでよいことになる。

村上（2011）では、「思わず」「うっかり」との異同を分析するため、②と③をまとめて、「意図的な行為ではない」という意味とする立場をとった。しかし、「つい」の意味を更に分析すると、②「そんな気持ちはなかったのに」と③「しようと思っていたのに」では、話者の意識に何らかの違いがあるのではないかとも考えられる。また、「その場の状況による影響」「しようと思っていたのに」などと書き加えられているところも「つい」のみが持つ特徴である。

4. 考察

ここでは、先行研究の分析を参考にして「つい」の用法を

（ｉ）〈意志で制御できる行動〉を〈意図しないで〉行う場合

（ⅱ）習慣・習性や条件反射的な本能などによってある行為を行う場合

（ⅲ）抑制力、習慣以外の場合

に分けて考えてみる。

4-1. 〈意志で制御できる行動〉を〈意図しないで〉行う場合

これは、辞書にある②の意味、「そんな気持ちはなかったのに、思わずそうなって」にあたる。

先行研究の浅野が挙げた例文（1）の分析を踏まえて、次の文を考えてみる。

（9）子どもに「どうしても欲しい」「これだけだから」と言われると、大人は弱いもの。涙に負けて、高価な物でなければつい買ってしまうことがないでしょうか。」（田中喜美子『家庭内教育法』）

この「つい」は浅野の言う「〈意志で制御できる行動〉を〈意図しないで〉行う場合」であり、この〈意志で抑制できる行動〉は〈抑制できる〉行動であるにも関わらず、「買いたい」という〈内的な動因〉が「子どもの希望通りに買ってはいけない」という〈抑制力〉を上回った結果、「買ってしまう」ことになる。

「つい」のこの意味・用法に入るものとして以下のような文がある。

（10）バイクで来ると呑めないから、そういう時は、遠刈田から、バスと電車で来るんだ。だけど、つい呑みすぎると、電車はともかく、遠刈田行きのバスがなくなる。（豊田有恒『ライダーの墓標』）

（11）私は初めて0歳児クラスを担任しました。全ての子がかわいらしくて、つい手を出して助けたくなります。それでいけないと、自らを戒めている毎日です。（相良敦子『お母さんの「発見」』）

次に、（9）の例文にある「つい買ってしまう」の表現に着目し、「つい」との共起表現の視点から考察してみる。

村上（2011）では、「つい」が「～てしまう・～すぎる」と共起しやすいことを述べている。例えば、「つい＋買う」は国立国語研究所『現代日本語書

き言葉均衡コーパス』から抽出された用例 500 例中[注1] 10 例見られ、更にその中の 9 例が「買ってしまう」の形で表れていた。残りの 1 例も「買い過ぎた」であった。「買う」との共起に限らず、「～てしまう・～すぎる」が表れる例文を調査した結果、以下のようになった。

［表 1］

共起表現	用例数
つい～てしまう	234
つい～すぎる	9

『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』（2001）では、「～てしまう・～すぎる」について以下のように提示されている。

～てしまう：「無意志動詞＋てしまう」のときは後悔の意味になりやすい。
～すぎる：「過剰に／程度を越えて、～する」という意味で、～することは好ましいことではないという含意を持ちます。

「～てしまう・～すぎる」には後悔や好ましくないという含意があることを踏まえると、例文（9）の場合「買う」ことに対しての積極性は感じられず、むしろ「買わないでいたい」「買わない方がいい」という〈抑制力〉があったにもかかわらず「買ってしまった」という後悔が感じられる。

このことからも、「つい」は浅野が指摘するように、〈意図しないで〉行う行動は〈抑制すべき行動〉であると考えることができる。その行動をとれば結果的にこうなるというような「行動の予測」があるので〈制御すべき行動〉なのであり、その予測があったにも関わらずしてしまったというのがこの「つい」の用法である。そして、そこには「してはならないことをしてしまった」という後悔の意味が含まれるのである。

4-2.　習慣・習性や条件反射的な本能などによってある行為を行う場合

これも、広い意味で辞書にある②の意味、「そんな気持ちはなかったの

に、思わずそうなって」に入ると思われる。

例えば、次の文を浅野の分析を踏まえて、考えてみる。

（12）うす暗い教会の中に入っていって、正面の十字架のところに行くと、なんかこう、つい手を合わせて拝みたくなる。（東海林さだお『のほほん行進曲』）

この場合、〈抑制力〉はあまり感じられないが、教会の中という外的な状況によって誘発される「手を合わせて拝む」という習慣の持つ力、すなわち〈内的な動因〉が「手を合わせる必要はない」という軽い〈抑制力〉を上回っている、と言える。

また、森田（1989）はこの「つい」の用法について「習慣や習性から自然にそうなってしまい、同じ状況であれば何度も同じことを繰り返す場合に用いられ」としている。

この意味・用法に含まれるものとして次のような文がある。

（13）親のない子と浜辺の千鳥日さえ暮れればちよちよと…　宿院へ帰りながら、辻は追分を歌っていた。酔うとつい出て来る歌だった。（瀬戸内晴美『諧調は偽りなり』）

（14）坂は人生そのものなのーだーと、「おやじの海」ふうの節が口をついて出てくる。そうなのだ。そういうふうに、長崎の街は、つい歌謡曲で歌いたくなる何かがあるのだ。（東海林さだお『のほほん行進曲』）

また、以下の例文も習慣性・習性による「つい」の用法に入る。

（15）とくに、相手が親しい人だったりすると、ついくだけた口調になりがちですが、あくまでビジネス上での電話ではきちんと話をするのが原則です。（盛田ひろみ『そのまま使えるスピーチ挨拶実例集』）

（16）いちばん身近な人たちだから、つい自分の身と比較する対象になりやすい。それだけに言い聞かせておく必要がある。姉は姉、妹は妹なのだと。（下重暁子『女が30代にやっておきたいこと』）

上記（15）（16）の例文にあるような「つい」と「～がち・～てしまいがち」「～やすい・～てしまいやすい」との共起について村上（2011）では、次のように報告している

［表 2］

共起表現	用例数
つい～がち	25
つい～てしまいがち	12
つい～やすい	1
つい～てしまいやすい	1

『初級（中上級）を教える人のための日本語文法ハンドブック』（2001）では、これらの表現について以下のように述べられている。

～やすい:「～やすい」に前接する内容が無意志的なもののときは「しばしば～する」の意味になります。
～がち:「～」が変化や動作を表す動詞の場合「～」の変化や動作が生じやすい傾向を持っていることを表します。

このことは、「～がち」「～やすい」の表す内容と共起数から見ると、やはり「つい」には習慣性が認められ先行研究の定義とも合致する。

他にも「習性が出る・傾向にある・口癖が出る」などと共起する例があった。このことからも、「つい」は習性・習慣性を表す場合に用いられやすいことがわかる。習慣性を踏まえて考えると（15）（16）に「つい」が用いられているということは動作主がその傾向にあるということでもある。はっきりとした〈抑制力〉が認められないとしても、ある程度は行動の予測が可能であるともいえる。

4-3.　抑制力、習慣以外の場合

これは、辞書の意味③「しようと思っていたのに、なぜか、そうならなくて」にあたる。

例（5）「気の毒でツイ言いそびれてしまった。」について浅野（1980）は、気の毒だと思うことで当然結果が〈予想〉されることであると分析する。つまり、「行動の予測」があるので〈制御すべき行動〉なのであり、その予

測があったにも関わらずしてしまった、と分析し、本稿の分類 4-1.〈意志で制御できる行動〉を〈意図しないで〉行う場合に含めている。

渡辺（1989）は、「つい　P だ。（P はある事態を表す）」というモデルを立て、「つい」と共起する動詞を一括する意義素性を「人間のコントロールし得る事態」とし、「P は人間の制禦力が正当に作用している限りは実現しないはずなのだから、「つい」は制禦力の弱化を招いてしまった心の緩みを表すのだ」とする。

また、渡辺は「コントロールがゆるむだけで実現してしまうような、ごく自然な結果が P であり、P を実現してしまった気のゆるみそのものが、既にさほど不当な失態ではない、というのだから、これほど言いわけに都合のよいものはない。「つい」は無意志化・無責任化の副詞である。」とする。

渡辺は「つい…そびれる」の表現には言及していないが、渡辺の分析を踏まえて、次の文を考えてみる。

（17）前から話をしようと思っていたんだけど、いつも誰かがそばにいて、それでつい話しそびれてしまって。ごめんねっ。（村田猛『来世も二人で』）

「「話をする」という行為を意識していたが、結果的には「話す」という機会を失った、つまり、話さなかった（話せなかった）。」と解釈できる。「話をしようと思っていた」ことは、浅野の言う〈抑制できる〉行動ではあるが、〈抑制すべき〉行動であるとは言えない。また、何回も繰り返している行動ではなく、浅野や森田の言う習慣や習性による行動にも当てはまらない。条件反射的な本能などによる行為でもない。

この文の「つい」に続く行為は、渡辺の言う「人間のコントロールし得る事態」ではあるが、前から「話をしようと思っていた」ことを考えると、「気のゆるみ」の結果というより、「いつも誰かがそばにいて」という事態の結果「言えなかった」と解釈できるのではないだろうか。また、そこには渡辺の言う「言いわけ」的な意味合いも感じられる。

先に述べた、国語辞典を分析した際に、「つい」の意味記述に「その場の状況による影響」「しようと思っていたのに」「その場の状況に流されて」という表現が加えられているものがあったが、(17) のような文に使われている「つい」の用法ではないだろうか。

他にも、次のような例があった。(20) は「つい」の強調形「ついつい」の例になる。

(18) 危篤連絡は、悲しみや驚きのために、つい肝心なことを伝えそこなうおそれがあります。(林えり子『マイ・ラストセレモニー』)

(19)「ええ。しかし、それは今日全額返済しましたよ。報告しなければと思いつつ、つい忙しさに追われて」(南英男『番犬稼業』)

(20) 前からずっとねじまき鳥さんに手紙を書こう書こうと思っていたのだけれど、実はねじまき鳥さんの本当の名前がどうしても思いだせなくて、それでついつい書きそびれていたのです。(村上春樹『村上春樹全作品1990～2000』)

村上 (2011) では、「つい」と「～そびれる・～そこねる」との共起例については調査しなったが、今回調べたところ用例は少なく、1330 例中 6 例だった。

5. おわりに

以上、副詞「つい」の用法を〈抑制力による行動〉、〈習慣による行動〉という 2 つの基準を設定して考察してきた。その用法に含まれた意味をどのように解釈するかによって、国語辞典における意味記述が異なってくるものと思われる。つまり、「つい」の意味を先に述べた②と③を別のものとし独立させるか、それとも、③を②に含めるかによって、辞書の意味記述が 2 つになるか 3 つになるかが決まるのではないだろうか。

「つい」が無意識を表す副詞であり、「そうする気持ちがないのに」してしまった行動に用いるとすると、意味②と③を一つにまとめることもできる。しかし、「その場の状況」が話者の行動に影響した結果であるとする

と、②と③を分けた方がより詳細な説明ができるのではないかと考える。

今回、本稿でいくつか例文を挙げて考察してみたが、他にも多くの例文があり、中にはどう分類すべきか迷うものも多かった。その分析は、今後の課題としたい。

注

1　翻訳、ブログの用例を除く。

参考文献

浅野百合子（1982）「ウッカリ・ツイ・オモワズ」『ことばの意味 3　辞書に書いてないこと』平凡社，2003 再刊

庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（監修：松岡弘）（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（監修：白川博之）（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

小矢野哲夫（1983）「副詞の意味記述について―方法と実際」大阪外国語大学留学生別科『日本語・日本文化』vol. 10

森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店

渡辺実（1989）「アスペクトの頭挿：「つい」「ついに」「ついぞ」」『上智大学国文学科紀要』6　上智大学、渡辺実（2002）に再録。

村上絢乃（2011）「無意識を表す副詞の意味分析―日本語教育への応用を目的に―」慶應義塾大学大学院文学研究科国文学専攻日本語教育学分野修士論文

森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店

渡辺実（1989）「アスペクトの頭挿：「つい」「ついに」「ついぞ」」『上智大学国文学科紀要』6　上智大学、渡辺実（2002）に再録。

用例

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』により検索して得た実例を用いた。

国語辞典

市川孝他編（2011）『三省堂現代新国語辞典』第四版　三省堂

沖森卓也・中村幸弘編（2005）『ベネッセ表現読解国語辞典―特装版―』ベネッセコーポレーション

北原保雄（2002）『明鏡国語辞典』第二版　大修館書店
金田一京介他編（2011）『新選国語辞典』第九版　新潮社
金田一春彦、池田弥三郎編（1998）『学研国語大辞典』第二版　学習研究社
阪倉篤善・林大監修（2004）『講談社国語辞典』第三版　講談社
新村出編（2008）『広辞苑』第六版　岩波書店
西尾実他編（2009）『岩波国語辞典』第七版　岩波書店
林四郎他編（2006）『例解新国語辞典』第七版　三省堂
森岡健二他編（2000）『集英社国語辞典』第二版　小学館
見坊豪紀他編（2008）『三省堂国語辞典』第六版　三省堂
林巨樹監修（2000）『現代国語例解辞典』第三版　小学館
松村明編（2006）『大辞林』第三版　三省堂
山田俊雄（2000）『新潮現代国語辞典』第二版　新潮社
山田忠雄他編（2005）『新明解国語辞典』第六版　三省堂